

1993年5月1日

投稿論文の少なさを考える

松岡 茂

日本鳥学会の編集幹事の片割れとなって、2年になろうとしています。この間、もう一人の編集幹事である斎藤隆史氏とともに、日本鳥学会誌の編集に関していくつかの改革を行ってきました。おもな改革の1つは、レフェリーを完全に複数制にしたことです。以前から複数制がうたわれていましたが、ほとんどの場合編集幹事がレフェリーの一人を兼ねていたようです。これを、今度はほとんどの場合、幹事以外の方お二人にお願いするようにしました。もう一つの改革は、(まだ完全ではありませんが)投稿の手引を作ったことです。

最初の改革点は、投稿論文を違った観点から評価することにより、論文の質の向上をねらったものです。しかし、この措置により、とくに論文審査が厳しくなったということはありません。日本鳥学会のレフェリーは、論文の受理・不受理を勧告するだけではありません。はじめて論文を書くような学生やアマチュアの論文については、内容はもちろんのこと字句の修正まで、かなり親切に修正を指示しています。レフェリーの指摘は、ほとんどすべての的を得たものとなっていますので、オリジナル原稿に比べて、明らかに改良された論文が印刷に回されます。2つめの改革は、投稿論文の完成までの道のりを短くすることを目的としています。どのように投稿論文をつくるかで迷っていた会員には、このフォーマットはかなり役に立つはずです。ただし、手引は、投稿論文の形式的な側面を定めているだけです。内容のつめは別の問題です。しかし、これも大会のときに設けられる論文作成相談室(大阪大会で初めて試みられ、今後も設置されると予想されます)に持ち込めば、編集委員が懇切丁寧に対応してくれるはずです。

こうした改革の成果が現われるには少し時間が必要です。しかし一方で、鳥学会誌への



鳥学会長野大会(1985年)にて 左から2番目が著者

巻頭言

投稿論文が少なく、学会誌の発行が大幅に遅れているという現実の問題があります。私は個人的には、投稿論文が少ないのであれば、それに合わせて学会誌の発刊回数を少なくすればよいと単純に考えています。印刷すべき論文がないのですから、しかたのないことです。いっぽう、“おまえのいうように単純なものではない、ある程度の号数が必要である”という意見もあります。編集幹事としては、論文がないのに号数は出さなければならないということで、つらいところです。学会誌に載る論文は、投稿を依頼すべき性質のものでないことは明らかですので、ただひたすら投稿されるのを待つのみです。

そこで、投稿論文が少しでも増えることを願って、学会誌に投稿することの意味を簡単に考えてみたいと思います。論文の公刊により、自己の科学的事実の発見を公表し、長く記録としてとどめることができますが、この目的のためであればなにも学会誌でなくてもよいことになります。しかし、学会誌には、学会のそうそうたる会員（まれに会員外の研究者）からなる複数のレフェリーが校閲した論文のみが掲載されますので、その論文は学会の審査をとったものであると認められます。“だからどうなのだ、面倒なだけだ”というのももっともですが、外部から見ると若干様子が違います。

生臭い話ですが、学生、大学院生が研究職という職につくときの業績評価は、学会誌発表論文に対して大きな評点を与えるのが普通です。ですからこれから就職しようとする学生、院生諸氏は、ぜひ学会誌に論文を発表してほしいと思います（論文を書けば職につけるというものではありませんが、職につけそうなときに論文がなければ立場はかなり悪くなります）。釈迦に説法ですが、すでに職を得ている研究者も同じことです。学会誌であれば、日本鳥学会誌でなくてもかまいません。関連する学会誌に投稿してもよいでしょう。サーキュレーションのことなどを考えると、鳥学会誌は不利かもしれません。しかし、ここではあえて鳥学会誌をすすめます。というのも、今のところ修正を終えた原稿が集まり次第印刷に入りますので、待たされることなく公刊にこぎつけることができます。同様に、新しい事実の発見をできるだけ早く公表しておきたい場合も鳥学会誌は有効です。

いっぽう、アマチュアの会員が学会誌に投稿しても、直接の利益を受けることは少ないかも知れません。学会誌、機関誌等を問わず公表するだけでもかなりの目標達成感や満足感が得られるでしょう。むしろ、学会誌につきもののレフェリー制度は面倒なだけかもしれません。しかし、高い山をめざすチャレンジ精神で学会誌へ投稿を試みてはどうでしょうか。最初の論文は、受理されないかもしれませんが、その過程でかなり多くのことを学べるはずで、それが次の論文作成におおいに役立ちます。また、内容的な問題は、論文作成相談室でつめることもできます。そして、論文を印刷までもってゆくことができればより強い満足が得られることまちがいなしです。

ところで、鳥学会誌への投稿論文数が少ないのは、外国の学会誌や国内のほかの関連学会誌に投稿するようになったからだといわれることがありますが、そうでしょうか。年に何十編もの論文がそうした形でながれていっているとは考えられません。日本の鳥学界がそれほどアクティビティが高いのならいいのですが、そうではないようです。また、それほどアクティビティが高いのであれば、鳥学会誌も論文不足で悩んではいけないと思います。鳥学会誌に投稿される論文数が少ないというよりは、日本では学会誌に載るような鳥の論文があまり書かれていないというのが真相のようです。アクティビティについていえば、鳥学研究のすそ野もかなり広がってきたように思います。また、ここ数年日本の多くの若手鳥学者が職につき、プロの鳥学者が増えてきました。若手研究者の活躍が起爆剤となって鳥学界が活性化することを期待していますが、編集幹事が多数の投稿論文に埋もれ、忙さのあまりに音をあげるようになるのはいつのことでしょうか。

(森林総合研究所)

桑原和之さんへ

山岸 哲

桑原さん、あなたの鳥学ニュース (No46) へ投稿された嘆きを読ませていただきました。まったく同感です。ただ、そうした思いは、一人あなただけのものではないことを知っていただきたく筆をとりました。

生物学の基礎をなすはずの分類・形態・系統に関する分野が、分子生物学の出現によって、大学の中で片隅に追いやられたり、各地の大学のその方面の講座が縮小あるいは潰されるようになって久しい時がたちます。日本学術会議に動物科学研究連絡委員会（委員長、丸山工作先生・千葉大）があり、私も第15期委員を努めています。鳥学会会員では青木清先生（上智大）もこの委員会に出ておられます。

本委員会では、桑原さんの嘆きとほとんど同じ（ただし系統進化の研究も射程にいれた）観点にたつて、全国に散在する分類・形態・系統学者（植物も含めて）が大学院生の指導が可能になるような広域大学院（動物系統学・12講座）の開学を1995年を目標にして検討

中です。中心になっていただける基幹大学もほぼ決まり、その大学より来年度の概算要求を文部省に出すところまで現在来ています。

ただ問題は、公・私立大学を組み込む手だてが今のところまったくくないことです。また、この計画の中には、将来的に博物館も組み入れることが考えられています。ただし、この場合にも、公・私立大学を組み入れられないのと、同じ理由（財源が違う）で、とりあえずは国立の博物館だけが対象となっています。でもこれとて、文部省内の所轄部局の違いから、案には進みそうもありません。

しかし、桑原さんの提起された問題の3のほんの一部は、徐々にではありますが、このように解決の一つの方向に向かって、少しずつ動きだしていることをお知らせしたいと思います。これで桑原さんの嘆きがなくなるとも、悪循環のすべてが断ち切れるとも、私は思っていませんが、お互いに協力し合って、将来の道を模索したいものです。

（大阪市立大学理学部）

1992年度鳥学会大阪大会を振り返って

— その 2 —

大阪大会を振り返って

中村 司

鳥学会は今まで近畿以西で開催したことがなかっただけに、大阪大会は色々な意味で期待が大きかった。大会を前に届けられた講演要旨はなんと137ページという今までの三倍も厚く、期待の一部がこの要旨に込められているような気がした。従来二題目の要旨が一ページに収められるようにしていたものが、今回は一ページがフルに使われゆったりしていた。

当日の大会参加者も多く、特にシンポジウム「熱帯雨林の鳥」では演者がクインズランド大学の橋川次郎先生とタイ国マヒドン大学のピライ・ブーンズワッドさんら外国の学者をお願いしたため国際色豊かで、その上最新

情報を基にした熱帯鳥の総括的な内容であった為、皆熱心に聞き入り熱気あふれるものがあった。引続き朴眞永氏の招待講演も行われた。

発表分野では生態学が最も多いのは従来通りであったが、その中でも身近なテーマも多く、保全につながるセンサスを織り込んだものもあった。また分類学や内分泌学など生理分野も以前より増える傾向が見えた。その他、国際協力によって行われたものも幾つかあった。それに座長に若手活躍者を起用したことも活気を生むことにつながったのかもしれない。大会全体の構成面から見て、初日の午後を自由集會に利用したことは従来にない工夫であると言えよう。いわばミニ国際会議を思わせるような大変有意義な学会であったと思う。
（山梨大学）

大会報告

日本鳥学会1992年度大会印象記

江崎保男

一般講演が始まる前日の自由集会からすでに満員御礼が出たとか。このことに象徴されるように、1992年度の大阪市立大学での大会は熱気あふれる雰囲気の中で11月21日から23日にかけて開催された。常に会場が満席に近いと思えたほどの参加者の数もさることながら、その多様性が一段と印象に残った。国公立・民間の調査研究諸機関からの新たな参加者、マスコミ・ジャーナリズム関係者の増加、さらに外国からの参加者もあったことなどがその要因であろう。

大会をつつむ熱気が、講演内容の着実なレベルアップに支えられていたのは間違いない。報告・記載に終始せずなんらかの論議を試みようとする姿勢が多く、発表から感じられ、これにともないプレゼンテーションも全体的によくなってきている。また、大会の雰囲気にもまれてあがってしまうという発表者もほとんどない。講演後の質問も活発で、しかもいろいろな人が手をあげるという風だった。

参加者の多様化とともに研究分野の多様化と総合化も進みつつある。既成の学問分野にとどまらず、自然保護・管理といった問題が大会のメニューになじんでいるあたり、鳥学会もしっかりと時代の流れにのっている。講演要旨集も立派になり、いよいよ鳥学会もメジャー学会への入口にさしかかっているのかなという思いも頭をかすめた大会だった。

(姫工大・自然環境研/人と自然の博物館)

大会に参加して

藤田 薫

鳥学会大会参加2年目の私は、今年はじめの発表としてポスター発表を選びました。当日は、大勢の方が聞きに来てくださり、批判や、批判や批判を、たくさんいただきました。1時間半もの間むちゃくちゃ言われ続けて、それがとてもうれしいなんて、はじめてのことでした。

ポスター発表では、発表者は、アドバイスや、アイデアや、情報など多くのことを、聞きに来た人たちから、受けとることができます。発表者にとって、多くを得ることのできるポ

スター発表が、もっと重視され、もう少し長い時間、せめて半日くらい、用意されてもいいのではないのでしょうか。今回は1時間半しかなかったため、残念ながら、他のポスターを聞きに行くことはできませんでした。

発表が終わったときには、とにかく疲れはてていましたが、なんだか、あの緊張感と疲労感がクセになりそうです。

最後になりましたが、いつ行ってもお茶が用意されている部屋と、立派な要旨集を用意して下さった大阪市大の皆様、本当にご苦労さまでした。行き届いたお心遣いのおかげで、大阪での心残りは、タコ焼きを食べられなかったことだけです。来年は愛媛。何を食べよう……。

(日本野鳥の会・横浜自然観察の森)

刺激を受けた鳥学会

大原 均

私が鳥学会に参加したのは実に7年ぶりでした。その間鳥と離れていたわけではなかったのですが、私のように地方ではほぼそと鳥を追いかけている者にとっては、自分のやっていることの学問的価値に対する不安と、現在の鳥学についての勉強不足などの理由から全国レベルの大会に参加し、しかも発表するというのは勇気がいることです。

今回は大会委員長の山岸先生が発表することをすすめて下さったことと、大好きな大阪が会場だったということもあり勇気を出して参加させていただきました。スライド発表はずいぶん緊張しましたが、発表後専門家の皆さんから貴重なご意見をたくさん頂くことができました。内容は乏しくても、方向や考え方を認めて下さった上で、さらに深めるための示唆を頂いたような気がして、来シーズンもまた頑張ってみようという意欲がわいてきました。また私と同じヤブサメの繁殖生態について、北海道の川路さんの発表や兵庫の黒田さんからも観察例をお聞きすることが出来、これからの研究に大変参考になりました。

今回の大会で全国のたくさんの鳥好きの方と知り合い、いろいろな鳥の話をお聞きでき、日頃小学校に勤めている私にとっては大きな刺激を受けた3日間でした。

(長野県飯田市上久堅小学校)

日本鳥学会に参加して

嶋田哲郎

今回の大会ではじめて発表したのですが、そこでわかったことは発表したほうがしないより学会は面白いということです。ひとつには、発表の場はもちろんのこと、懇親会や時間の空いているときに発表したものを材料に見知らぬ人とすぐに議論できることが挙げられます。これが知り合いを増やす一番手取り早い方法だと思います。さらに、そうした人から、厳しい批判や有益な助言を得ることで、自分の研究をさまざまな角度からみることができました。主体的に動くと思いが強くはなりますが、それだけ得るものも大きいと思います。

また、今回は大阪ということもあって、ついでに琵琶湖をみてきました。こういう機会がないとなかなか行けないのですが、カモをみている私としては面白い場所でした。こうしたことも含め、これまでの聞くだけの学会とはひと味もふた味も違った有意義な学会でした。

(東邦大学)

1992年度鳥学会大会見学記

須藤淳子

鳥学会大会が終わって1週間、会員とは名ばかりの私に“感想文を…”という上田氏からの有難い(?)お達し。ここで悩んでみても始まらないので、とりあえずアマチュアの私的感想という形で書かせていただきます。

22日午後から参加したこともあり、印象に残ったのは、やはりシンポジウム。タイ、マ

ヒドン大のブーンズワッド女史による「サイチョウの生態」は、スライドを中心に鳴き声のテープ、そしてところどころにユーモアを交えての講演。内容もわかりやすく、保護活動のための提言には、女性研究者らしい細やかな心づかいが感じられ、とても共感を覚えました。続いてはクインズランド大の橋川次郎氏による「熱帯林の鳥の特徴」。オーストラリアやアマゾン、ニューギニアなどでのご研究を通じて、森林伐採により鳥がどのような影響を受けるか、絶滅を防ぐにはどうすればよいか、などをお話しされました。残念だったのは、多くのスライドを用意されていたのに、時間の都合で一部しかみせていただけなかったこと。個人的に興味のあるアオアズマヤドリがチラッとみえたりして“詳しくうかがいたい”という思いにかられました。

さて、そうした点をフォローするためにあるのが懇親会。研究者同士で情報を交換したり、自由に話し合うことで、フィールドとはまたちがう新しい発見があるのでは、と思いました。実際、あちこちで話が弾んでいたようですが、哀しいことに“単なるバードウォッチャー”の域をなかなか脱け出せない私には気おくれもあり、雰囲気についていけなかったのが実情。'93年こそは何かテーマをみつけ、会話に加わられるようになりたい、と思っ

てはいるのですが…。諸先輩方、ご指導よろしくお願ひします。

最後になりましたが、お世話下さった山岸哲先生、そして大阪市立大の皆さん、おつかれさまでした。要旨集も読みやすく、助かりました。どうもありがとうございました。

(保谷市在住)

— 学術集会 —

関連学術集会 (1993)

- ◆ 6月3～5日 国際シンポジウム「ツルと湿地の未来」(東京:パレスホテル)
 - ◆ 6月5日 「ウェットランド・シンポジウム」
(東京:朝日新聞新館浜離宮アサヒホール)
 - ◆ 6月9～12日 第111回AOU(アメリカ鳥学会)大会(アラスカ:フェアバンクス)
 - ◆ 9月1～9日 第23回国際行動学会議(スペイン:no.46)
 - ◆ 9月20～24日 第6回国際ライチョウシンポジウム(イタリア:no.46)
 - ◆ 10月9～11日 日本鳥学会大会(愛媛大:本号)
- 関連分野の学会大会・シンポに関する情報をお知らせ下さい(切:2ヵ月前)

「鳥の学習と文化」開催される

樋口広芳・中村浩志

3月6日(土)午後1時から7日(日)12時30分まで、立教大学で津戸基金シンポジウム「鳥の学習と文化」が開かれました。このシンポジウムは、物事の前後関係を理解していると思われる、いわゆる洞察力をはたらかせたような行動を主な対象に、行動の機能を明らかにしたり、行動の起源や発達過程について議論するためのものでした。2日間で5つの講演が行なわれ、それらの講演内容に沿って意見が交換されました。全体として、行動の起源と発達過程についてははっきりしない点が多くありましたが、行動の機能についてはすぐれた観察が行なわれているように感じられました。最後の総合討論では、今後、関連の情報を広く呼びかけて収集し、また、実験できるものはなるべく実験を試みて、研究を推進していこうということが確認されました。

演題と演者

1. 甲虫消化の促進にブルリングを利用するブ・ボウソウ 中村浩志(信州大・教育・生物)
2. ササゴイの投げ餌漁の起源と発達 樋口広芳(野鳥の会・研究センター)
3. リュウキュウアカショウビンの貝割り行動 松村澄子(山口大・医技短大部・生物)
4. メジロの盗蜜行動とその文化圏 上田恵介(立教大・一般教育・生物)
5. 車を利用したハシボソガラスのクルミ割り行動 仁平義明(東北大・教養・心理)

これらの講演の要旨は、日本鳥学会誌に掲載される予定です。松村澄子さんと仁平義明さんは非会員であり、旅費などもほとんどお支払いできなかったにもかかわらず、講演を快く引き受けてくださいました。どうもありがとうございました。

「鳥の学習と文化」 シンポジウムに参加して

黒沢令子

初めて参加致しました。アマチュアとしてどこまで鳥学について行き、ひいては貢献できることがあろうかという、不安を持っていましたが、それを吹き飛ばしてくれるようなシンポジウムでした。

シンポジウムは3月6日(土)1時から5時までと翌7日(日)の9時から12時30分まで立教大

学で行われました。各講演は50分間で10分ずつの質疑応答がありました。スライドやVTRなどを駆使した解り易い講演に活発な質問や意見が出て、両日とも最後の討論の時間は熱のこもったやり取りが行われました。

冒頭樋口広芳氏によって、鳥の行動における「洞察力」と「文化」と呼べるような行動の起源、発達過程について議論を行う旨の趣旨説明があり、5種類の鳥とその行動について講演が行われました。以下つたないもので



すが、内容のまとめをしてみました。

(1)甲虫消化の促進にプルリングを利用するブッポウソウ (中村浩志、信州大学)

ブッポウソウの生態調査の折に気づいた巣周辺の「奇妙なもの」の謎と、解明のための実験結果について。プルリングは胃内で甲虫などを消化する引き臼の役割を果たしている。今後の課題としてはブッポウソウの営巣木の形態が関東と関西以西(中国地方)では異なるらしいことから、中国地方でもこのプルリング利用が見られるのかなどのデータが欲しいこと。

(2)ササゴイの投げ餌漁の起源と発達 (樋口広芳、日本野鳥の会研究センター)

熊本の水前寺公園とフロリダのマイアミで見られるササゴイの投げ餌漁に差異が見られること。日本のササゴイは手近な物なら何でも利用し、改造もすることから「道具」とも言えるような投げ餌だが、一方マイアミのササゴイは観光客が投げたパンなどの餌のみを利用すること。以上からこの行動の起源について推考したところ、二つの可能性がある。ササゴイが人の行動から学んだ物まね的観察学習の可能性と、樹上から落下する木の実やクモ等に対する魚の行動を見ているうちに自らが考え付いた行動とする可能性。

後者の可能性に対する疑問点はササゴイの分布域に対して、投げ餌行動が見られる地域が極めて狭いことがあげられる。

(3)リュウキュウアカショウビンの貝割り行動 (松村澄子、山口大学)

集落付近のアカショウビンが、人が捨てた貝殻の中に潜むヤドカリを石やリヤカーの柄等を叩き台にして、叩き割り、好んで食べる。

疑問点その1:非常に固い巻貝(オオベスガイ)の殻を何故30回以上も叩いて苦勞して割るのか?(ヤドカリはたいてい軟らかい身がもげて中に残り、ツメの部分しか食べられないことが多い)その2:リヤカーの柄や鉄棒などに打ち付けると音が良く響くことからテリトリー行動や、求愛給餌に使われている可能性はないか?

(4)メジロの盗蜜行動とその文化圏 (上田恵介、立教大学)

ハイビスカスのような深い花に出会ったメジロが盗蜜行動を取るようになった過程について。北緯30°以北では見られないことと南でもマレーシアなど他の花蜜専門食の鳥がいる所では見られない。小笠原の父島では地域によってハイビスカスの被害率が異なる。

疑問点:父島のハイビスカスの植栽の歴史を調べてみてはどうか?

(5)車を利用したハシボソガラスのクルミ割り行動 (仁平義明、東北大学)

車を利用してクルミを割って食べるガラスの行動を「いくつかの要素から構成される融通性のある行動図式による行動」ととらえ、各要素を念頭に置いて、観察を深める。車利用の意味は遊びか、低コストか、投下しても割れないクルミを割る方法として発生したのか?「文化」と呼べる条件としては、ある規模の集団で、必然性のある背景があり、その成員に特有な行動様式が共用、伝達され、また改変が可能であること。

以上は全て人間生活に近接した場所で観察された鳥の「特異な」行動についてでした。

どれも従来の各種の鳥の行動から微妙に逸脱していて、しかも人間も顔負けの高度な知恵を働かせた行動です。今回のテーマは採食行動に関連しているので、観察し易く、季節に関係無く観察できるものが多いので、私を含めて、全国のアマチュア観察者や、一般のバードウォッチャーでも、観察データを集めて調査に協力することができそうです。

もう一つは、このような「文化」がもし、世界の各地で観察されるとしたら、(ササゴイの投げ餌漁や、ブッポウソウやヨタカによる人工物の消化材としての利用)それが、同時発生的に起こったのか、または「文化」としてなんらかの方法で伝播したのかを調べることによって、人類の文化の発生と伝播の謎を解明する手がかりになるのではないかということまで思い及んで、気持ちを昂ぶらせた二日間でした。

(東京都立日野高校・英語科)

「ここは本当にメンフィスですか」と聞いたのが始まりだった。というのは自分のスーツケースが最後まで出て来ないのである。夜になって着き、約110km離れた大学のゲストハウスまで行かねばならないので、とにかく大会案内にあったシャトルを早く見つけねばと気がせいていた。表示がよくわからないまま、同じ飛行機に乗っていた数人の後に付いて行き、いっしょに(そのつもりで)手荷物の出てくるターンベルトの前で待っていたのだが。時差ボケの頭で周囲をよく見てみると、一つ向こうのベルトの上にスーツケースは残っていた。急いでカウンターに行き、事情を話すと、そのシャトルは定期便ではないので、多分空港の車止めの何処かにいるのだらうと言われ、小走りに外に出た。少し捜すと、ようやくミシシッピー大と書いた小型のワゴンが見つかった。念のために到着便を大会本部に連絡していたのが幸いして、待っていてくれたのだった。

同乗者は9名で、うち3名は女性であった。乗り込むと、カーラジオが大きい音で流れていた。少しして3人の大統領候補の討論会とわかった。大学までの半路以上ずーっとそれを聞かされた。しかも私以外は非常に熱心に聞いていて、時々爆笑が起こる。少なくとも、ペロウ氏の発言が、一番受けがよかったことはわかった。討論が終わってラジオが切られると、今度は2～3グループに分かれて、盛んに討論のコメントをしていて、到着まで鳥の話は勿論のこと、世間話もほとんどなかった。これらのことで、かえって私の張りつめた緊張がかなりほぐれたようだった。

Colonial Waterbirds Societyは集団繁殖性水鳥学会というようなものだろう。今年度のこの大会が、1992年10月14日から18日まで合衆国ミシシッピー大学で行われた。そしてキタアメリカウ(Duble-crested Cormorant)の特別シンポジウムとワークショップが組まれ、さらにメインエキスカージョンもこのウの採食地と罫を見るというものであった。本種は北アメリカのみに生息し、ちょうど日本のカワウのように内陸部に進出して生活するウである。そしてやはりカワウと同じように最近増加し生息地を広げていることが報告さ

れていた。そこで、日本のカワウで起こっている問題に似たことが論ぜられるだろうと予想し、また自分自身のカワウのデータをまとめていく上で何かの指針を得たいと願って、行ってみることにした。

大会は、連日朝6時か6時半からの探鳥会で始まり、夜10時か10時半までというスケジュールで、しかも会期の真真中に丸1日のエキスカージョン(ミシシッピー川を貸し切った外輪船で遡航し、デルタ地帯をバス旅行)があって、初めて外国の学会に出た私には驚くことばかりであった。私は、ウ関係の所ばかり出ていたので、正確な延べ参加者はわからないが、鳥学会大会よりやや小さいくらいの規模で、2割は女性であった(行きのシャトルの同乗者の性比ほどではなかったが)。しかし、どちらかというとなッチイ仕事の多い鳥を扱うのだから驚きである。しかも、年輩の女性も少なくないのだ。また、個体群管理関係のテーマの代表討論には、カナダと合衆国の政府関係者らが出て来ていた。参加者名簿が無いのでわからないが、1割くらいがヨーロッパからの人のようだった。このことには、翌年の大会がフランスで開催されることと、さらに1993年4月ポーランドでカワウの国際ワークショップがあることがすでにわかっていて、それが影響していたようだ。なお、東洋人は私一人であった。

この学会自体は、一般講演での部会や従来の大会などを参考にしてみると、多分カモメ屋さんが一番多く、次いでアジサシ屋さん。そしてサギ屋さん。その後は団子状態でトキ類、ウ類。最後にコウノトリ類などその他を



やる人という構成のようだ。このようなことから、今回の大会の規模や、大会自体に一種家族的な雰囲気を感じられたことが関係しているようである。

私自身が一番勉強になったことは、彼らの講演のやり方であった。スライドのほとんどがカラーであったことや、図の多くが3次元で作図されていたことにも感心したが、何よりも話の運び方とスライドの使い方がスマートであった。まず、何をテーマとしたか明言し、結果のまとめとそれに対する仮説をスライドに箇条書して解説し、そして仮説の検証と全体の論議をする（日本では、多くがスライドをどんどん見せ、もじもじよと言っているうちに終わるようだが）。語学力の余り無い私にも、講演はかなり理解出来た。今まで、多くの方々が国際学会に出ていて、どうしてあの発表のやり方を、日本でやってくれない

のか不思議でたまらない（私が、あまり根性を入れて聞いてなかったのかもしれないが）。彼らには、聞き手を説得させる訓練が学校の正規の科目にあるらしいが、このようなことは是非日本でも真似て欲しいものだ。

何人かからけしかけられて、お調子者の私は「旅先の恥はかき捨て」との日本の伝統にしたがって、「カワウのオス・オスペアリング」でポスター発表をした。しかし、対話を始めるとすぐ正体を見破られ、「興味深いですね」と御世辞を言われるのが落ちだった。やはり恥はただの恥だった。ただ、ウ類で戸籍を作って、個体関係をみている人がいないことは確認出来た（すなわち、競合者がいないこと）でも、あの熱意と層の厚さを目の当たりにすると、今後いい報告が続出して来るに違いないだろうと感じる次第であった。

（上野動物園・飼育課）

成末編集委員の

若手研究者インタビュー(8)

原戸鉄二郎さん

今回は琉球の鳥人、原戸鉄二郎氏を紹介したい。原戸氏は南国「沖縄」の鳥を調べたい一心で、大阪から琉球大学に進み、バンの研究で修士号を取られた。「沖縄島におけるバンの繁殖生態と社会構造」（1989）は、実に150ページにおよぶ大論文で、分布と個体数変動、生活史、繁殖生態、ヘルパー、家族関係などについて詳細に述べられている。

そのほか、「西表島におけるカムリワシの食性と巣立ち雛の行動」（1987、沖縄島嶼研究5）、「リュウキュウツバメのモビング行動—予報—」（1986、沖縄生物学会誌24）などの研究がある。1992年の鳥学会大阪大会では、屋根の上にある魔除け「シーサー」の口の中で繁殖したり、芝生の上でトカゲを捕食するイソヒヨドリの生態についてポスター発表されていた。このように、原戸氏は幅広く研究対象を広げているとの印象を受けていたが先日、思いがけなく学生時代のエピソードを耳にする機会があった。

コウモリの研究で知られているM女史の伝によれば、西表島で調査をしている時、奇妙な音を聞き、それがアカショウビンの仕業であることを原戸氏から教えられたという。アカショウビンが石や鉄にヤドカリを打ちつけ



て割っていたのである。M女史は面白いテーマと思い、原戸氏にその研究を進めて行くように熱心に勧めたようである。しかし当時の彼は、バン一筋に打ち込んで研究していたので受け入れてもらえず、とうとうM女史自らが、アカショウビンを調べる羽目になったのだった。

私は原戸氏のバンに対する思い入れの深さを垣間みたような気がした。と同時に、そこには沖縄へのこだわりが根強くあるように思われた。これからも沖縄を拠点に、そこに棲む鳥たちの一つ一つを明らかにしていって行くことであろう。また沖縄方面の鳥やナチュラリストを研究してみたいという方、特に独身の女性の問い合わせを首を長くして待っている。目下、沖縄の中学校で教鞭をとる31才の独身である。

学会改革に関するアンケートの結果について

会長 森岡 弘之

去る2月に実施された学会改革に関するアンケート調査は、別表のような結果となった。回答者数が昨年末の評議員選挙の投票数(208)を上回る257となり、会員が学会改革に関心を持っていることが裏付けられたのは喜ばしい。

今回は、単に回答者が多かっただけではなく、回答者の3/5が意見も書いて下さった。今までは、会員に意見を求めても反響がほとんどないのが実態であったので、これも画期的な現象だと思われる。今後は、役員と一般会員との間にもっと緊密な意志の疎通が必要であろう。意見が書かれていた81通の回答書は全部コピーし、評議員と監事全員に回覧した。

さて、アンケートの結果は、①会長選出は候補者を立てて直接選挙、②会長の連続三選禁止、③評議員の再選は制限なし、④常任評議員の連続三選禁止、⑤学会事務は会員のボランティア(幹事)ではなく、パートのバイトで、がいずれも回答の過半数を得た。特に⑤は圧倒的多数(91.4%)の支持を得た。一方、③評議員の連続三選禁止の可否は、賛否の差がいちばん少なかった。

寄せられた意見は文字通り多様で、全部を述べることはできない。ほとんどの意見はアンケートに好意的であったが、数人からアンケートは「誘導的」だとの声があった。私は今回のアンケートが特に誘導的であったとは思わないが(少なくともA・Bの2案が示されていた)、アンケートや世論調査に誘導的な要素を認めるとしても、多数の人の意見を集約するためにはやむを得ない方法であろう。

意見の中でいちばん目立ったのは、やはり評議員の連続三選禁止に係わるもので、主に③-Aを選択された方から、半数改選で三選禁止はどうかという意見であった。半数改選は、実は私たちも何度か考慮した点である。評議員の交代は確かに望ましいし、私が見る限りでも現評議員以外にも評議員になって欲しい人が何人もいる。しかし、現評議員の中

には、わが国の鳥学の発展のために必要な方が何人かいる。単に交代だけの目的で有用な人材をはずしても、得るところはないであろう。本会の場合、プロといわれる人々の間でさえ、学会誌に定期的に研究を発表している者はごく少数であることを考慮しなければならない。

私の個人的意見は、評議員の問題は連続三選禁止ではなく、①定年制の導入、②評議員選挙法の改良、③会員の投票意識の向上などで対応するのがよいと思う。評議員の定年制は、改革委員会ではキンさんギンさんの例まで持ち出されて反対されたが、やはり一定の年齢で後進に道を譲るべきであろう。なお、定年を個人の良識にまかせておくと、いて欲しくない人ほどいつまでも居残る結果となる。

次に、会員の1人から現行の15名連記を5名連記としてはどうかという提案があったが、私も5名連記案に賛成である。15名連記では、学会のために働いている人もそうでない人もなべて、現職が有利である。地区別選挙で単記がいちばん望ましいが、会員が圧倒的に関東地区に集中している現状では、地区別選挙の実施はむずかしい。

学会の存在目的が研究の推進と向上にあることは言うまでもない。論文数が評議員選出の基準でないのは明白だが、プロ・アマを問わず定期的に研究成果を発表していることは学会の評議員に選ばれるひとつの条件であるだろう。会員数800名以上・評議員15名の学会が、年間15編足らずの論文(短報でなく、論文)が集まらずに会誌の遅刊を招いているのは、先頭に立つべき役員の実績であり、そんな評議員を選んだ会員にも責任の一部があらう。

私は、以上の3点の改革によって、必要な人材は確保しつつ、評議員の新陳代謝は可能だと考えている。なお、評議員会は公開すべ

きだ。例えば、傍聴人を認めてはどうか。

評議員連続三選禁止に次いで多くの意見があったのは、会誌のあり方の問題である。これに関しては、私たちも考えていることがあるので、次の機会に取り上げたい。

会長の選出は、現行の評議員会における指名より直接選挙の方が「民主的」だ、とは私たちも考えていない。評議員会で選出する方が、むしろ妥当な人選ができると思う。しかし、直接選挙であれば、現行のように次の大会で承認されるまで新会長の誕生を待つことなく、また会長選挙を行なうことによって評議員選挙の投票率も上がると期待している。さらに、候補者を立てることにより、会長候補者の意見なり抱負なりを聞くことができるのは前進だと思う。

常任評議員（会）はどんな制度なのかよくわからない、という声もあった。常任評議員はいわば理事に相当する者であり、日常の学会運営は常任評議員会が評議員会に代って行

なう。勿論、会則の審議、重要人事、予算・決算の承認などは評議員会で行なう。従来の幹事会は幹事相互の連絡用に設けられたもので、会則にも規定がなく、理事会的な役割を果たすべきではない。

最後に永年会員の問題だが、私も永年会員の1人として（ただし、今のところ維持会費を払っている）、会の財政が立ち行かぬのなら権利を返上してもよい。しかし、学生会員を新設する一方で永年会員は廃止せよとの意見には同調しかねる。学生が入会しないのは金がないからではなく、学会に会費に見合う魅力がないせいだが、これは一般会員にも共通する問題で、学生だけを特別扱いする理由は、学生に対するへつらいでしかないように思われる。

とにかく、今回はこのアンケートの結果に沿って改革案をまとめ（③の評議員の問題については現行どおり）、足りないところは何年か後に改めて改革をやればよからう。

アンケート結果			
	A	B	無効
①	208 (80.9%)	42 (16.3%)	7 (2.7%)
②	198 (77.0%)	58 (22.6%)	1 (0.4%)
③	109 (42.4%)	144 (56.0%)	4 (1.6%)
④	199 (77.4%)	56 (21.8%)	2 (0.8%)
⑤	235 (91.4%)	19 (7.4%)	3 (1.2%)
計	257 (うち意見付 81)		

1993年度日本鳥学会大会のお知らせ

今年の大会は、10月9日(土)～11日(月)に四国・松山の愛媛大学で開催されます。四国でははじめての大会です。多くの会員の方の積極的な参加・発表を期待します。

大会の問い合わせ・申し込み先：

〒790 松山市梅味3-5-7 愛媛大学農学部環境化学研究室

(TEL: 0899-41-4171 (内 368, 391, 392, 369) FAX: 0899-43-5242)

案内・申し込み書は本号に同封されていますので、お見逃しなきようお願いいたします。もし同封されていないときは、上記までご請求下さい。(実行委員長：立川 涼)

お知らせ

《基金運営委員会からのお知らせ》

1) 来年度オーストリアのウィーンで開催される第22回国際鳥類学会議へ伊藤基金を使って参加を希望される方は、8月末日までにお申込下さい。審査の上、最大4名まで、お一人25万円が補助されます。申込資格及び申込方法については、鳥学会誌の37巻4号、254～256ページをご参照下さい。

2) 平成5年度に（平成6年3月まで）津戸基金を使ってシンポジウムを計画されている会員は、5月末日までにお申込下さい。3万円が補助されます。身近な人たちで、ローカルな集会を気軽に企画して下さい。

以上2件に関しておわかりにならない点がございましたら基金運営委員会幹事までお問い合わせ下さい。

申込先及び問い合わせ先：〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138、大阪市立大学理学部動物社会学研究室 基金運営委員会幹事 山岸 哲（TEL：06-605-2584、FAX：06-605-2584）

《会費の支払い方法について》

会費を現金書留で事務局まで送って下さる方がおられますが、事務が煩雑になりますし、間違いの元ですので、会費はすべて郵便振替（東京1-6599）で振り込んで下さい。手違いで振込用紙が同封されていない場合は、郵便局の窓口でもらって頂ければ幸いです。（会計幹事）

《訂正》

(no. 46) P. 9下から9行目 山根茂夫 → 山根茂生

助成金

公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金

公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金の助成対象者が、昨年度に引き続き本年度（1993年度）も募集されます。

1) 絶滅のおそれのある小動物の保護・増殖に関する調査・研究、2) 絶滅のおそれのある小動物の保護に係る生息環境保全及び環境復元・回復に関する調査・研究に対し、5件以内、1件60万円が助成されます。

応募締切は、1993年5月31日。申請書等は下記宛にハガキで請求してください。

申請書等の請求先

〒113 東京都文京区湯島2-29-3
(財)自然環境研究センター内

公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金
担当 茨城 康弘 (TEL. 03-3812-1881)

次号 (No.48) 原稿締切は6月20日、発行は8月1日です。

編集後記

- 北朝鮮に行くはずでしたが、チームスピリットのために中止になりました (Go)。
- 奄美～徳之島～与論島～沖縄～台湾～伊豆大島～父島～母島……島めぐりの3月でした (K)。
- 若手研究者の皆さん！是非伊藤基金を使ってオーストリアに行こうではありませんか (成)。

鳥学ニュース No.47

1993年5月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒169 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内 Tel. 03-3364-2311

発行人 森岡弘之

印刷所 添田印刷株式会社

編集 花輪伸一・大堀 聡・成末雅恵・藤田 剛・上田恵介 (幹事)